

首尾の松

ここに生えている松の木は、江戸時代（1603 年–1867 年）に有名な陸標になった神聖な木が生えていた場所を示しています。当時その木は、旅人からも地元の住民からも縁起の良い木だと考えられていました。蔵前橋の端近くにある首尾の松に、「始まりと終わり」という意味のこの名がつけられたのは、冒険や旅の開始地点または終了地点という意味を持たせたかったからかもしれません。川に橋がかけられる前には、川を渡るのにはかなりの危険が伴う可能性があり、川岸の大きな松の木が目標の目印として機能していたのです。また、船で浅草の歓楽街に行く観光客やそこから帰る観光客にとっては、ある種のお守りかつ地域の境界を示すものとなっていた可能性もあります。1770 年頃に初代の首尾の松が枯れてからは、何度も何度も新たな木が植えられ、7 代目となる現在の木の横には、それとわかるように 1962 年に石碑が建てられました。